

平成三十年七月十一日 参拝

ここは親鸞聖人蓮如上人の御旧跡

建保二年（一二二四）親鸞聖人は、流罪がとけて越後国から常陸国へ赴かれる途中藤野木の里にご逗留になり、夜もすがら教を語られたと伝えられている。

信濃国の領主井上越後守善勝は、深く聖人に帰依し、一子善親を聖人の弟子として聖人のお世話をさせた。法名を善性と給わる。そして磯部（茨城県）に一寺を建立すこれが磯部勝願寺の開基である。

宝治二年（一二四八）善性は、師聖人の命をうけ、始めて藤野木の里に來り、聖人の教を弘める。それ以来代々磯部勝願寺と藤野木御旧跡を兼帯（住職兼務）で布教につとめ第一六世善栄まで続いた。

文安四年（一四四七）本願寺第八世蓮如上人は、宗祖親鸞聖人の旧跡を慕い、北国御巡回の際、藤野木御旧跡に御滞在された時、勝願寺第一二世慶順は、親しく上人の御教化にあずかり、直弟子となって布教につとめた。上人はご逗留のしるしとして、堂前に一本の榎を植えられ、これが大きくなって御旧跡を榎の御坊と称せられるようになった。

勝願寺累代の住職が藤野木御旧跡を拠点として熱心に布教に努めたので、門葉巷にあふれ信越地方の門徒が非常に増えた。第一五世善順の時、足利義輝卿より由緒あつて南条に敷地の御朱印を給わり、道場を建立し、更に一六世善栄の時、天正九年（一五八一）織田信長より寺領（八町四面）の寄進をうけ、磯部より事実上南条に移つて南条勝願寺となった。（正行寺の前身）

以来藤野木御旧跡は、浄土真宗の説教所として繁盛した。特に四月の二五日には、近郷近在の参詣者で賑わい、飯山の商人が出張して門前市をなすほどであった。（大正末期ごろまで）

弘化四年（一八四七）善光寺大地震で本堂倒壊、嘉永二年（一八四九）近隣門徒の寄進により本堂を再建する。

明治六年（一八七三）学制施行により、旭、外様、富倉、を学区とする最初の小学校が、御旧跡の由緒にかんがみ、当所に開設された。

昭和三十五年（一九六〇）庫裡を取り壊し、同四十六年夏、隣家の火災により、本堂屋根及び付属建物を類焼し、同年秋、屋根部分を改築、近年道路などの拡張により石門を除き、榎木も伐採して往時の面影を一変させている。

平成元年十月

しんしゅうみのちこおりときわのしょう
信州水内郡常盤庄 藤ノ木村

ごきゅうせき
御旧跡

歴史年表

一一一四 建保 二 親鸞聖人流罪赦免

越後から常陸・稲田・へ

井上越後守善勝・善親
善性：磯部勝願寺開基

茨城県古河市磯部

聖人の勧めで冷沢から藤ノ木に改名

一二四八 宝治 二 善性：始めて藤ノ木へ 磯部と兼帯で 住職

一四四七 文安 四 八代蓮如上人 御旧跡に逗留 近隣に 布教

十二世慶順・直弟子・庭に榎を植える
これより えのき御坊と称す

一五八一 天正 九 十六世善英 織田信長命 南条 勝願寺となる

一六〇〇 慶長 三 十二世教如上人：十字名号を ・御真筆と鑑定・

一六〇七 慶長 七 織田信長より寺願配分東本願寺となる

一六一五 慶長二〇 松平忠輝の招へいにより 十七世善慶 高田瑞泉寺へ

一六四一 寛永一八 十三代良如上人より 正行寺の寺号授与

十六世善英養子：善覚 正行寺開祖となる

一六八二 天和 二 飯山城主 松平遠江守 天和の書上

一七五六 寶暦 六 二十一世善栄 御旧跡由来書

一八二六 文政一〇 二十代廣如上人：十字名号を御下賜

一八四七 弘化 四 善光寺大地震 本堂倒壊

一八四九 嘉永 二 本堂再建

一八七一 明治 四 二十一代明如上人 御消息 藤ノ木二十五日講

一八七五 明治 六 文部省学制施行 御旧跡に 学校開校

一九五五 昭和三〇 忠魂碑再建

一九六〇 昭和三五 庫裡取り壊し

一九八一 昭和四六 火災屋根焼失

一九九二 平成 四 飯山市 史跡に指定

村原郡内久下園漢住野其
 市鎮木ノ孫字大 一
 景之房御榎 木野藤

明治三十三年五月刊

榎御房ノ由來
 此ノ道場ハ往古東源寺ト
 稱スル程ナリ今ハ其ノ
 見真大師越後國ヨリ關東
 へ赴カレテ止宿アリキ時ニ
 カレ當寺ニ法ニ服シテ此寺
 住僧大郎ノ道場トナリス其
 手樹ケレヨリ真宗ノ道場ト
 稱サレタリ中興惡道大師北
 國巡教ノ
 際リ市租ノ遠隔ヲ吊ハン爲
 不リテ留錫市教セサレハ
 今現ニ中租大町目住ノ水儀
 復ノ榎樹アリ幹枝老木大
 子蓋ヲ故二人皆稱シテ榎ノ
 ヲ毎年四月二十五日恒例ニ
 執行スルヲ以テ遠近ノ道俗
 ハガ如シ其賑カナルヲ近
 仏間ニ於テ祀テ其比子見
 ザルナリ

木野藤

榎水御房

座經

